St. Luke's International University Repository

2000年度から2004年度カリキュラム総括評価:その2　科目評価について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): curriculum evaluation, students, faculty, evaluation of subjects 作成者: 菱沼, 典子, 及川, 郁子, 長江, 弘子, 射場, 典子, 亀井, 智子, 有森, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/489

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

報　告

2000年度から2004年度カリキュラム総括評価
－その２　科目評価について－

菱沼　典子[1)]　及川　郁子[2)]　長江　弘子[3)]
射場　典子[4)]　亀井　智子[5)]　有森　直子[6)]
(聖路加看護大学2005年度カリキュラム検討委員会)

Summary of Curriculum Comprehensive Evaluation from 2000 to 2004
Part 2：Evaluation on the Subjects

Michiko HISHINUMA, R.N., M.S.[1)]　Ikuko OIKAWA, R.N., M.N.[2)]　Hiroko NAGAE, R.N., M.N.[3)]
Noriko IBA, R.N., M.N.[4)]　Tomoko KAMEI, R.N., Ph.D.[5)]　Naoko ARIMORI, R.N., D.N.Sc.[6)]
(St. Luke's College of Nursing Curriculum Examination Committee of 2005)

[Abstract]

At St. Luke's College of Nursing, all students and faculty members evaluate the curriculum at the end of semester from 1995. Every five years, the results of the evaluations summarized. This report summarizes the evaluations given on subjects other than clinical practice from 2000 to 2004.

The number of responses to the questionnaires was low. They were 0-100% by students and 47.1% by faculty members. The means of the satisfaction levels (1 to 10 points) on subjects by students were 10：1.0%, 9.9 to 9.0：13.6%, 8.9 to 8.0：33.0%, 7.9 to 7.0：33.0%, 6.9 to 6.0：15.5%, and 5.9 to 5.0：3.9%. The means of points of 8 items (1 to 4 points) of evaluations by faculty members were 4.0：7.8%, 3.9～3.5：32.0%, 3.4～3.0：42.0%, 2.9～2.5：13.7%, and 2.4～2.0：2.7%. The evaluations given by students did not agree with those of faculty members at all. Both students and faculty members provided many comments in relation to the subjects. From the results, several problems with the evaluation system and curriculum were identified. One of them was how to increase the response rate and another was how to put the results to practical use.

[Key words] curriculum evaluation, students, faculty, evaluation of subjects
[キーワーズ] カリキュラム評価，学習者，教員，科目評価

[抄　録]

聖路加看護大学では，1995年より全学で継続的にカリキュラム評価を実施し，５年ごとに総括評価を行っている。今回2000年度から2004年度の５年間の実習を除く科目に関する学習者と教員の評価結果を検討したので報告する。評価票の回収率は，学習者（科目により０－100%），教員（47.1%）と低かった。学生の満足度（10段階）の平均は10点1.0%，９点台13.6%，８点台33.0%，７点台各33.0%，６点台15.5%，５点台3.9%であった。教員による８項目（４段階）の評価の平均点は4.0が7.8%，3.9～3.5が32.0%，3.4～3.0が42.0%，2.9～2.5が13.7%，2.4～2.0が2.7%であった。学習者と教員の評価は必ずしも一致しなかった。自由記載では，両

1）聖路加看護大学　基礎看護学　St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing
2）聖路加看護大学　小児看護学　St. Luke's College of Nursing, Child Nursing
3）聖路加看護大学　地域看護学　St. Luke's College of Nursing, Community Health Nursing
4）聖路加看護大学　成人看護学　St. Luke's College of Nursing, Adult Nursing
5）聖路加看護大学　老年看護学　St. Luke's College of Nursing, Gerontological Nursing
6）聖路加看護大学　母性看護学　St. Luke's College of Nursing, Maternal Infant Nursing & Midwifery

2006年１月６日　受理

者から多くの意見が寄せられた。今回の結果から，回収率を上げることとカリキュラム構成の検討と授業運用方法の改善が課題となった。

Ⅰ．はじめに

聖路加看護大学では，1995年度のカリキュラム改定後，カリキュラム評価を継続的に行っており[1)2)]，2004年度は５年ごとの総括評価の２クール目であった。今後のカリキュラム検討の資料とするために，2000年度から2004年度の５年間の学習者による科目評価，教員による科目評価の結果について，カリキュラム検討委員会で討議した。本稿では実習科目を除く全科目に関する評価の結果を報告し，実習科目の評価は「その３」で報告する。以後本稿において科目という場合は，実習課目を除いた全科目を指す。

Ⅱ．科目評価の方法

１．学習者による科目評価

単位認定者が常勤か非常勤かにかかわらず，すべての科目に関して，大学で定まった評価用紙（評価項目は**表１**参照）を用い，学生からの評価を得ている。授業が終了する２週前に，教務課より担当教員に評価用紙配布の依頼がなされる。教員の判断で，最終授業あるいはその前の授業で学生に配布し，その際には評価の意味を説明し，回答への協力を依頼する。評価用紙は無記名で，教室，教務課窓口に常設してある回収箱に入れる。

教務課では評価用紙を回収し，科目ごとに分類して，集計は業者に依頼している。これは，評価用紙は無記名であるが，自由記載の意見欄での個人特定の危険性を避け，また集計の正確性を期すためである。科目ごとの集計結果はファイルに綴じて教務課で保管し，全教員が閲覧できる。

表１　学習者による科目評価項目

１～７は「全くそう思わない」から「大いにそう思う」の４段階評価
１．学習目標がわかりやすかった
２．授業内容は理解できた
３．この科目で意図している物事のとらえ方，考え方を学べた
４．全体を通して授業方法はよかった
５．科目の理解を助ける教材・資料が活用されていた
６．科目目標と教授―学習内容は一貫性があった
７．課題は内容に対して適切だった
８．科目に対する満足度（10段階評価）

表２　教員による科目評価項目

すべて「全くそう思わない」から「大いにそう思う」までの４段階評価
１．学習目標は学生にとって適切だった
２．教授内容は適切だった
３．この科目で意図している物事の捉え方，考え方を教授できた
４．全体を通して教授法は適切だった
５．科目の理解を助ける教材・資料を活用した
６．目標と教授―学習内容は一貫性があった
７．課題は科目内容に対して適切だった
８．評価方法は適切だった

２．教員による科目評価

学習者による科目評価と同様に，専任教員，非常勤講師にかかわらず，すべての科目の単位認定者に，教務課から定まった評価用紙（評価項目は**表２**参照）が配布される。教員はその科目を担当している全教員と合議の上で評価を記入し，教務課に届ける。集計は学習者のものと同様に，業者に依頼している。

Ⅲ．科目評価の結果

１．学習者による科目評価

評価票の回収率は100%から０%まで幅があった。選択科目では選択した人数にも差があり，回収数は選択科目，必修科目ともばらついていた。同一科目でも年度により回収率に差があった。また，個々の評価項目については，科目ごとに担当者が次年度の改善への資料にするという性格上，科目間の比較は適切とはいえないことから，総括評価として10段階の満足度の５年間の平均点を検討した。

評価の対象となった科目数は107科目であった。このうち，１年のみの回収であった４科目を除いた103科目について検討した。103科目の内訳は，教養科目45，基礎科目20，専門科目38であった。

満足度の平均が10点１科目（1.0%），９点台14科目(13.6%)，８点台並びに７点台が各34科目（各33.0%），６点台16科目（15.5%），５点台４科目（3.9%）であった**（図１）**。９点以上の15科目は，教養科目７，基礎科目１，専門科目７で，すべて選択科目であった。６点台の16科目は教養科目６，基礎科目６，専門科目４で，５点台の４科目は教養科目２，基礎科目１，専門科目１であった。５・６点台の20科目のうち，教養科目の５科目は選択科目であったが，他はすべて必修科目であった。**図２**は教養科目，基礎科目，専門科目別に満足度得点の割合を示したものである。５・６点台は基礎科目で33.3

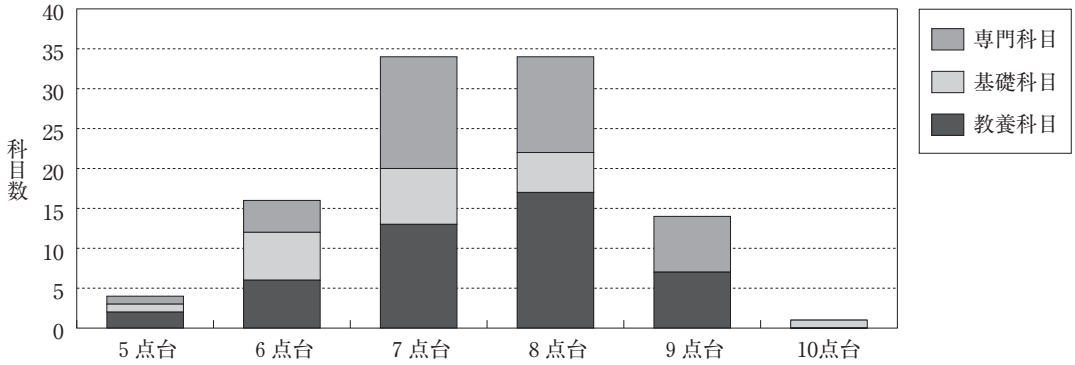

図１　学習者による科目満足度（平均値）の分布

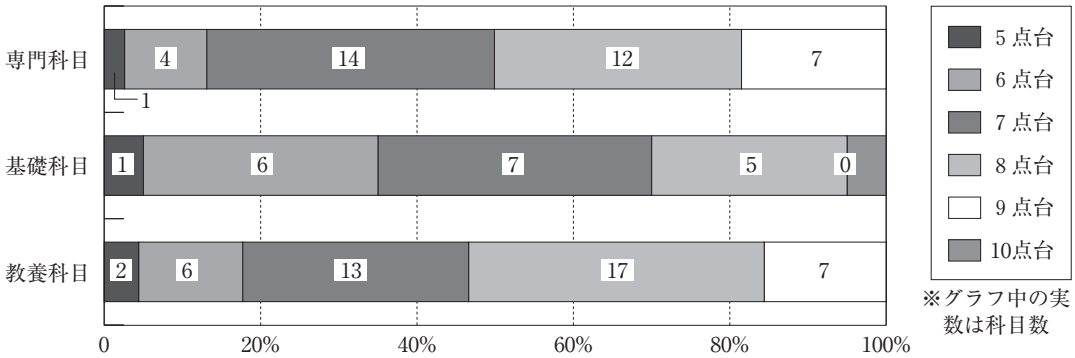

図２　学習者の科目群別満足度の割合

%，教養科目17.8%，専門科目は13.2%で，教養科目，専門科目で８割以上が７点以上であるのに対し，基礎科目の満足度が低かった。

次に自由記載の意見を科目の順序性，他科目との関連，全体の整合性，開講時期や時間数，学習環境，その他全体に関わる問題の６項目に分けて整理した。「科目の順序性」について，統計学演習はもっと前に入れてほしい，形態機能学と生涯発達論Ⅰは看護論の前に開講している必要がある，小児から成人，老年となるように講義を組み立ててほしい，看護研究の文献検索演習は４年次よりも前にするほうがいい等，具体的な意見が出されていた。また，学士編入学生のカリキュラムに関して，順序性の逆転が指摘されていた。

「他科目との関連」については，教育学と教育方法論の違いがわからない，倫理学と生命倫理の連携がとられるといい，保健医療福祉行政論演習と講義のつながりがわからない，疾病治療概論と各論を分ける意味がわからない，看護学概論と生活と健康の関連がわからない等，関連が不明とする意見があった。また，内容の重複の指摘が，環境論Ⅱと保健医療福祉政策論，形態機能学と生活と健康，生涯発達論と生涯発達看護論，集団力動論と慢性期看護論Ⅱについてあった。

「全体の整合性」に関して，シラバスと実際が異なっている，複数の教員が関わる科目について，教員による指導の違い，教員間の意思疎通がなく不安といった意見が複数あった。「開講時期や時間数」については，個別の科目について時間を増やしてほしいという意見があったほか，講義での情報量が多いので，もっと時間がほしいという意見があった。その他，見学や演習時間を増やしてほしい，もっとはじめから見学に行きたいという意見もあった。

自由記述が最も多かったのが「学習環境」についてであった。形態機能学演習や様々な演習等のグループワークでの教員の不足，演習室の不足が指摘されていた。学生数に合った教室や教室の備品の整備（マイク，スクリーンの大きさ，ホワイトボード）と，設備備品の点検・見直しが必要，アーツルームが狭く制限が多いとの指摘もあった。教材に関し，ビデオの貸し出し，映像資料がほしい，自己学習の教材を増やしてほしいとの意見があった。また教科書として購入させながら使わないのはおかしい，図書館に参考文献を増やしてほしい，貸し出しのパソコン台数と時間数を増やしてほしいという意見もあった。

「その他全体に関わる問題」として，グループワークと PBL で授業を行う意味を再検討してほしい，グループワークでは受け持った教員による差があり質の確保をしてほしい，教授方法や講義に関する不満（目標がわからなかった，早口，板書の仕方，資料の作り方，量が多い，講義でレジメを読んでいるなど）が複数の科目についてあった。

表３　教員による評価票の回収数

科目分類：科目数	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度
教養科目：　46	27（58.7）	25（54.3）	18（39.1）	13（28.3）	14（30.4）
基礎科目：　15	11（73.3）	9（60.0）	5（33.3）	9（60.0）	7（46.7）
専門科目：　32	24（75.0）	13（40.6）	14（43.8）	16（50.0）	14（43.8）
計　93	62（66.7）	47（50.5）	37（39.8）	38（40.9）	35（37.6）

（　）％

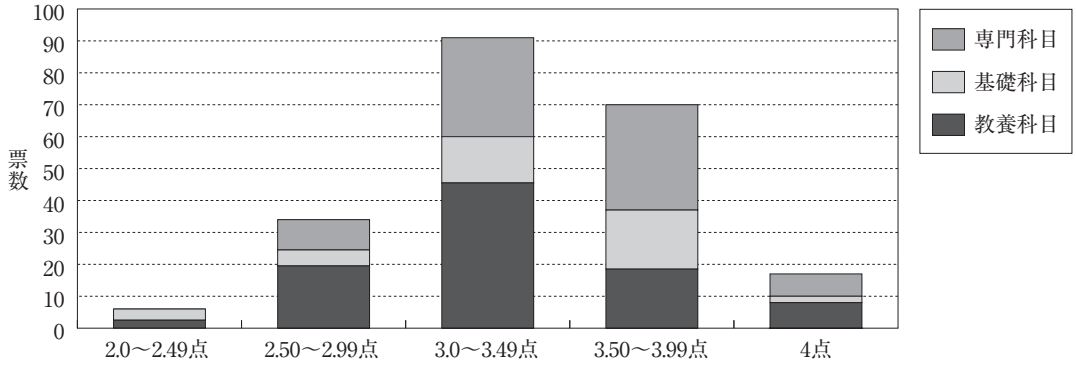

図３　教員による科目評価

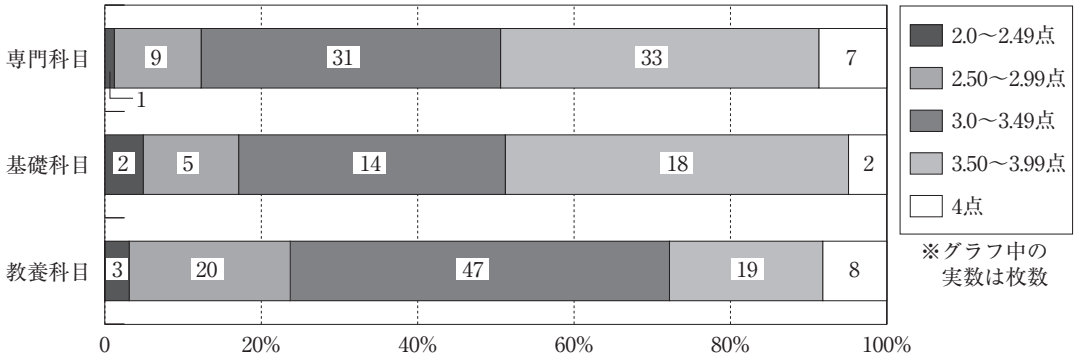

図４　教員による科目群別の評価点数の割合

２．教員による科目評価

教養科目46科目，基礎科目15科目，専門科目32科目，計93科目が評価の対象となった。しかしながら，93科目５年間で465枚の回収があるべきところ，回収数は219枚で回収率は47.1%であった。回収状況の詳細を**表３**に示す。年ごとに回収率が低下し，５年間のデータが揃った科目はわずか５科目であった。まったく評価が戻っていない科目は教養科目で10科目，基礎科目，専門科目でそれぞれ１科目あった。

そこで，年度および科目にこだわらず，８項目の平均点を集計したところ，4.0点が17枚（7.8%），3.9～3.5点が70枚（32.0%），3.4～3.0点が92枚（42.0%），2.9～2.5点が34枚（13.7%），2.4～2.0点が６枚（2.7%）であった**（図３）**。２点台のうち学生の満足度が５点ないし６点だった科目と一致していたのは11枚であり，４点の中で学生の満足度が９点台以上のものと一致したのは５枚であった。科目群別にみると，基礎科目，専門科目についての評価は3.5以上が50%であったのに対し，教養科目は30%弱であり自己評価は厳しかった**（図４）**。

自由記載の内容については，学習者と同様の６項目に分けてまとめた。

「科目の順序性」について，国語表現法を１年に文学を２年にするとよい，科目の積み重ねの縛りがないため，講義科目を落としても実習に進むことができるのは問題である，科目内での順序性として成長発達段階に沿うのがいい，専門科目の選択科目ⅢはⅠ・Ⅱに積み上げる科目となっているが，ゼミとの違いが不明確で，看護学統合に近づきすぎているという意見があった。このほか学士編入生の科目の順序性が逆転していることについて指摘があった。

「他科目との関連性」については，生化学と生物学が連動するとよい，倫理学と生命倫理等が連動するとよい，疾病治療論と看護がつながるようにしてほしい，生涯発達看護論のⅠとⅡの連携ができていない，臨地実習と講義科目のつながりが不明確，選択科目とゼミを複数とる学生がいるが無理がある，総合実習とゼミを連動させた

い，看護研究Ⅱ・総合看護とゼミを連動させたいがあげられた。

「全体の整合性」について，慢性期看護論で精神看護学を学ぶが急性期の理解は可能なのかという意見や，科目の目標を明確にして演習と講義を整合させてほしいという意見があった。また編入生のカリキュラムへの改善案も示されていた。

「開講時期や時間数」について，英文読解は４年次がいい，教養科目をすべての学年で取れるとよい，講義と実習が重なるため演習の人材確保ができず，場合によっては演習に影響する，研究法Ⅰの文献検討は１年後期か２年前期がよい，短期集中の講義科目は過密で無理がある，PBL の時間数が少ない，時間割上の意見（１限は遅刻が多い，特定のコマを避けたい等）のほか，講義時間が不足，講義と実習が重なることの人員不足が複数記述されていた。

「学習環境」については，演習室の不足，１クラスの学生数が多い，実習室が不足，人数に合った教室といった教室関連の意見，運動施設が不十分，視聴覚教材の不足や活用が不十分という意見があった。

「その他全体に関わる問題」として，日本語教育を入れたい，保健医療福祉行政論や環境論Ⅱは国家試験のためには４年次がいい，国際看護の科目を開講したい，哲学的な科目で評価を点数で行うのは無理がある，学生数の増加と教員数の不足があげられていた。

Ⅳ．考　察

カリキュラム評価としては，全数回収が望ましいが，今回の５年間の集計では，学生，教員からの評価のいずれも，回収数が少なかった。このことは，学生・教員の科目評価に関する意識の低さを表している。評価結果に信頼性がおけ，意味あるものになるには，回収を増やし，多くの意見を聞くことが必要である。今後，科目評価の結果がどう活かされるのかを示し，科目評価の意味が理解され，全員の協力が得られるように努力する必要があろう。しかしながら，教員が自分の担当科目を５年間まったく評価していないという事実は残念であった。

回収数が少ないという限界がある中で，今回の結果を見ると，全体的に教員の科目評価は学生より高い傾向があり，教員と学生の評価は必ずしも一致していなかった。10点満点の学生の満足度評価の平均点は，５点台から10点までに分布していた。７点以上が専門科目で86.8%，教養科目82.2%であったが，基礎科目に関しては66.7%と低く，基礎科目のあり方は課題となった。満足度が高かったのが選択科目であったことは，クラスの人数が少ないことや，学習者の意欲とニードが満足度に影響していると示唆される。一方，教員の評価では，7.3%がすべての評価項目を“大いにそう思う”と高く評価していた。学習者の満足度が概して低かった基礎科目でも，教員の評価は専門科目と同程度に高く，学習者と教員の不一致が目立っている。

学生と教員の共通希望事項は，研究法Ⅰの文献検索を１～２年次に早めること，成長発達段階に沿うこと，教室環境の向上，小グループでの学習時の教員の不足の４項であった。また，編入生のカリキュラムに順序性が逆転している指摘も両者からあった。この点については，カリキュラム開始当初から，学士の学生が入学までに身につけている統合能力に期待して，一部順序性が保たれないものになっていることの説明が不足していたかもしれない。

今後，各科目に関して評価結果を活用していくことと同時に，カリキュラム全体としての見直しに今回の結果を活用して，教員と学習者の乖離がないようなカリキュラムの構成，また学生の満足度が高くなる科目の運用方法をさらに模索していきたい。

引用文献

１）小山真理子，平林優子，南川雅子他．聖路加看護大学におけるカリキュラム評価．聖路加看護大学紀要．26，2000，123－132.

２）聖路加看護大学2000年度カリキュラム評価委員会：カリキュラム評価システムについての答申．(学内資料．未発表)